**令和６年度　新居浜市総合教育会議　会議録**

１　開催日時　　令和７年３月１１日（火）１０：００～１１：００

２　開催場所　　市庁舎３階　市長応接会議室

３　出 席 者　　新居浜市長　古川拓哉、教育委員会教育長　高橋良光

　　　　　　　　教育委員会委員　尾藤一彦、近藤智佳、本田郁代、大橋勝

　　　　　　　　企画部長　加地和弘、教育委員会事務局長　竹林　栄一

事務局

教育委員会事務局次長、教育力向上推進監

学校教育課長、学校教育課次長、主幹教諭

　　　　　　　　　総合政策課長

４　会議事項　　（１）不登校対策について

（２）その他

５　会議録

|  |  |
| --- | --- |
| 企画部長市長企画部長市長教育委員会事務局市長教育長大橋委員教育委員会事務局本田委員教育委員会事務局市長教育委員会事務局　教育長教育委員会事務局市長教育委員会事務局教育長近藤委員大橋委員本田委員尾藤委員教育長教育委員会事務局市長尾藤委員　近藤委員市長近藤委員市長 | ただいまから令和６年度新居浜市総合教育会議を開催する。まず初めに、会議公開の取り扱いについてであるが、本日の会議については、非公開とする内容はないと考えるので、原則通り、本日の会議を公開とし、途中、傍聴希望があれば、傍聴等を許可したいと思うが、よろしいか。（承諾）それでは、会議の開会にあたり、主催者である市長から挨拶を申し上げる。新居浜市総合教育会議の開催にあたり、一言挨拶を申し上げる。教育委員の皆様におかれては、平素より、本市教育行政の推進に格別のご理解・ご協力をいただき、厚く御礼申し上げる。新居浜市総合教育会議は、首長である私と教育委員会の皆様が、十分な意思疎通を図り、本市教育の課題や、目指すべき姿をともに共有し、連携して効果的な教育行政を推進していくために設置しているものである。本日は、不登校対策について、意見交換などを行う予定である。委員の皆様におかれましては、忌憚のない意見をお願い申し上げ、開会にあたっての挨拶とする。会議の進行においては、この会議は市長が主宰するという形であるため、これからの進行は市長が進行する。本日の協議事項は、「不登校対策」についてである。新居浜市教育大綱では、「児童・生徒の健全育成」を基本計画に掲げ、個々のニーズに応じた相談体制の整備・充実を図るとともに、児童・生徒にあった学びの場の提供、スクールソーシャルワーカー等の専門委員の配置・連携を強化することを取組方針とし、小・中学校における相談活動の充実や、適応指導教室のおける教育の充実などに取り組んでいるところである。しかしながら、不登校児童生徒数については、年々増加傾向にあり、令和７年２月末の状況では４３５名となっており、これまでにない危機的な状況となっている。今後の不登校対策を実施するにあたり、総合教育会議にて意見交換を含め、協議を行うものである。まずは、教育委員会事務局より、本市の不登校児童生徒の現状、不登校対策について説明をいただき、皆様のご意見を伺いたい。それでは、教育委員会事務局から説明をお願いする。（資料を基に説明）教育委員会事務局から説明があったが、ただいまの説明に関して、不明な点も含め、質問や意見はないか。　資料の不登校児童生徒分類においては、自宅で過ごしている７８．４％のうち、半分ぐらい専門機関等とつながっており、学級担任とは約９割の児童生徒が会って話ができている状況である。訪問しても接触が難しいのは１割程度である。自宅で過ごす児童生徒は自宅でどのように過ごしているのか。個票の内容を確認すると自分の好きなことをして過ごしている子もいれば、何かしらの学習やオンラインで学習している子など様々な方法で過ごしている報告を受けている。子どもだけで過ごすのか、保護者が家にいるのか。子どもだけで過ごす家庭もあれば、保護者がいる家庭もあり、家庭環境は様々である。全国的に不登校児童が増加傾向にあるとのことであるが、どのような理由が考えられるのか。例えば、家庭でゲームを夜遅くまでやりすぎ、朝起きれず登校ができないケースや学校での人間関係がなかなかうまく築けず、学校に行くことに抵抗感があるケースなど内容は様々である。休んでいるとやはり勉強が大きなハードルになってくる。例えば、ICT支援員が、家でオンラインをつないで学習する環境をと言っても学習に対する気持ちが向かなくなっている。もちろん学習に前向きな生徒もいるが、そうでない生徒もいる。今、１人１台端末があるため、オンラインでつなぐことも可能であるが、それを望む家庭と家で自分の時間を過ごしたいという家庭があり、先方のニーズの問題で繋げないケースもある。教育現場を見て思うことは、小学生で学習につまずいて、椅子に座っても、授業に興味を持てなくなり、集中力が切れている子を結構見かける。確かに理解できない分からないことをずっと聞くことは大人でも辛いが、小学校で分からないことは中学校に行ってもずっと分からないこととなり、どこかで理解できるようにと考える。現在の不登校の内訳としてはどのような生徒になるのか。現状は、学習に対する意欲がない場合や保護者を含め、学校の必要性や学校に行かなければならないという考えが薄れ、行かなくても別の選択肢があるとか行かなくても自宅で過ごせるツールがあるとかで内向的な動向による理由が増えていると考える。急増している原因は何かと考える。本市だけでなく、全国で同じような状況となっている。学校に対する捉え方の部分が大きいように感じられる。また、子どもたちが自宅にいても不満なく過ごせる環境があることが原因と考える。文科省が調べている不登校の様子や理由については、不安や意欲低下などが上位を占めている。休めてしまう環境というのもある。今回の市議会でも答弁したが、中萩中学校でサポートルームが設置されたなかで、悪化した子６名に対し、現状維持・好転した子の方が圧倒的に多い結果であったことを考えるとサポートルームの意義は大きいと感じている。どの中学校も別室を用意して対応しているが、サポートルームが違う部分は、サポートルームのナビゲーターがいてさらに必要に応じてICT支援員が教室の授業をタブレットで見れるような対応をし、一時期そこで過ごすことになってもまた、教室に戻れる子もおり、この制度は非常に有効であると感じる。今回千葉市に行き、花園中学校を見てきたがどのように思われたか。教育委員に伺いたい。担任が専門でいることは、大きいと考える。先生が非常に子どもたちに寄り添った対応が感じられた。例えば、席の配置をどのようにすればよいかや教室にいる本来の担任との間もうまく取り持っており、保護者も安心できるのではないかと感じられた。千葉市と比べると予算規模が違うため、一概に言えないが、予算をだいぶかけている印象があった。ライトポートやステップルームなど元校長などの非常に教育熱心でベテランの先生が対応していることで、子どもたち生徒が話を聞こうとする気持ちが芽生えているのではと感じた。子どもたちも最終的には、大人と関わったり、社会とつながっていくことが後方支援として大事ではないかと考える。現時点で学校に行けないとしても、将来的には社会と繋がって生きていけることを最終目標として考えると学級には入れなくても学校にあるサポートルームに入り、少しずつでも入っていける場を各中学校に持つことは大事であると考える。小学生の不登校が増えていることについては、中学校のように同じ対応は難しく、教員の人手不足の問題もあるため、学校での受け皿ということは難しいと思う。今のあすなろ教室は小学生も通っておりその実績を活かし受け皿としてもよいかと考える。また、川西以外でも川東、上部にも増やし、通える場所を増やせば、小学生にとっても救える道があるかと考えるが、予算を伴うことである。今まででも相当のサポートをしているが、今から増加することについても、対策が必要になってくると感じた。世田谷区と千葉市に先進地研修に行ってきたが、人口規模が違うため、同じことができるかと言えば難しいと思うが、問題は同じものを抱えている。千葉市では、小学校の不登校児童が増えてきていることに危機感を持ち、対策を進めていくという話があった。市長が言うようになぜ、こんなに増えるのか。受け皿ばかりにお金を出していても限りがなく、予算にも限界がある。不登校にならないように対策をしていけば、将来的にいい形ができるのではないだろうか。いろいろな教育関係者や教育委員会の中でも聞いてきたが、それほどの理由がなくても休むことができる状況があり、家庭も社会もそれを容認する雰囲気があるのではないのか。いろいろな生き方がある中で、無理に登校しなくてもいいというようなことが社会全体に浸透してしまい、それが悪い方向に向かっているのではないかと感じる。共働き世帯が増え、子どもとも関わりにくく、休みだして１週間、１０日、２週間と経過するうちに、休むことが日常となり学校に行くことが難しくなる。市としてできることは、学習についていけない子をどうするのか、また、社会との繋がりがない子をどのようにしていくかによってアプローチが変わってくると考える。まず、サポートルームで学校には行くことができるが、教室に入れない生徒をそこで支える。あすなろ教室のように学校には行くことが難しいが繋がれる場所を用意するため、予算をお願いしたい。また、小学生がこれだけ増加していることに対し、早めの対策が必要と考える。１日、２日、３日休むと休むことが日常化となるし、本人も登校しにくくなることも考えられるため、その辺りを学校、教育委員会を挙げて、初期の子どもたちをどうフォローするのかいろいろなアプローチを考えながら対応していただきたい。先程の不登校対策事業についてであるが、年間欠席日数状況においては、年間２００日程度の授業日がある中で、全体的に人数は増えているが、大半を休む生徒は微増なのに対し、３０日～５９日や、６０日～８９日などの休んでいる生徒数は激増している。ここで取り残さない対策が必要である。来年度から１校拡充予定のサポートルームは、中萩中学校では好転の方が多い事業である。来年度導入する中学校でも同じような成果を期待している。他市の状況をみると松山市、今治市は、基本的には、有償ボランティアという形で運営しており、地域で子ども食堂を運営している方や地域のお世話をしている方が対応しており、学習を支援する場所よりは校内に居場所を作るといった性質を持ったものを導入している。今治市はすべて導入済み。松山市は、今年からということを聞いている。本市では、教員資格を持った職員の配置を予定している。学校に来づらくなっている先生も増えていると聞く。先生にもカウンセリングが必要と考える。また、教員不足の中で１人２人欠員となれば、学校が回らない。校長先生が教壇に立たなければならないケースも考えられる。限られた予算を効果効率的に判断すると学校数を縮小し、一定の規模を確保することが必要になる。教育予算をどんどん増やしたい思いはあるが、状況的には厳しく地域の方からは理解が得ることが難しい判断もせざるをえない場面も考えられる。このままの状態では、子どもたちだけではなく、子どもたちを支える先生にも負担がかかる。サポートルームにおいても、中学校だけではなく、小学校にも必要と考えるが、ただやればよいものではなく、やる限りは、効果成果をみて進めるべきと考えている。不登校になる主たる理由がよく分からず不登校となっている。少しでも学校に行く負荷を減らすような方向を具体的にすべきではないのか。違うアプローチから学校に行きやすい環境を整えることも検討すべきと考える。通学する部分の負荷や学校でみんなで食べる美味しい給食などの楽しみ、団体行動が今後社会に出たときに役立つといったような仕組みやプログラムを考えていくことも必要と考える。数年前に新居浜西高の保健委員が学校に持っていく荷物の重さと体に及ぼす影響を調べていた。子どもたち自身も問題であると感じているのではないか。以前、不登校対策をしている方と話した際に、制服をやめればたくさん学校に行ける子が増えるという話があった。保護者が思っている以上に着るもの対してこだわりがあったり、着るものを我慢しているということは考えたことがなかった。これは、全く違うかもしれないがアプローチの一つかと考える。教育委員に携わり不登校対策を見ていく中で、なぜ学校に行かなくてはならないのか、という問いに対して、私たちは、どういう答えを持っているのか、と考える。学力のため、人間関係のため、いい体験ばかりでなく、いろんな体験をして学ぶと言ってもわかってもらえるのか。保護者にもわかってもらいたい。いろんな体験をして、子どもたちが自立をしてしっかりご飯が食べれる人になって欲しい。そのために学校に来て欲しい。そのあたりの根本的なことを保護者にどう理解してもらうのかということも不登校対策のとして必要なのではないかと、考えている。先生を含めみんなが何のために学校に来るのかと言われたときにみんながそれぞれに答えを持っていてほしい。人それぞれ違う理由も持っている。そんな大人が学校にいることが大事と思う。一つの理由では、子どもも息苦しいし、先生も息苦しい。多様性の中で育つことが好ましいと考える。義務教育機関の中でいろいろな子や家庭がある中で、様々ことを覚えていくことは大切なことである。成功体験や失敗体験、いろんな体験をする機関であり、学力だけではなく、将来、新居浜市を背負い、地域を引っ張っていくようなリーダーシップを持つ子どもたちが育つことができればいいのではないか。合理的な判断も必要だが、相手を見て相手を思い、人としてどう判断するかを考える部分が学校には詰まっていると考える。せっかく公立学校で学んでいるので、そこを救い上げて頂きたい。多様性を大切にして不登校対策を全面的に押し出して進めているまちは、見たことがないのでぜひ、積極的に進めていただきたい成功してもらいたい。給食の話が出たのでこの場を借りてお伝えさせて頂く。昨日、市PTA連合会の上部地区の役員、学校長とPTA会長が集まった会の中で、給食センターの給食が美味しいという話になった。本来の美味しい学校給食に近づいており、栄養バランスもとれた食事を提供してもらえてありがたいという話があったことを報告する。他に意見等はないか。本日は、皆さんからそれぞれのお立場や経験から貴重なご意見を賜りありがとうございました。今後においても、教育大綱に基づき、不登校対策の施策を検討、実施していきたいと考えておりますので、引き続き、ご助言、ご協力をお願いする。他になければ、本日はこれにて閉会する。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　以上 |